

# 『トガニ 幼き瞳の告発』

監督：ファン・ドンヒョク

出演：コン・ユ、チョン・ユミ ほか

2011年／韓国／125分



公式サイト

各配信サービスにて配信中  
©2011 CJ E&M CORPORATION, ALL RIGHTS RESERVED

## 社会を旅する シネマ

きっともっと 近くなる  
きっともっと 知りたくなる

韓国の田舎町にある聴覚障害者学校に赴任した美術教師のイノ。競争社会の中で無事に教師の仕事を得て、希望を胸にクラスへ行くも、生徒たちは無表情でどこか怯えてもみえる。異様な雰囲気になり、ほかの先生に相談すると「10年経つけど、まだ心を開いてもらえませんよ」との返事。ある日の放課後、女子トイレから叫び声が聞こえ、慌てて駆けつけたときも、守衛から「この子は退屈なときに叫んで遊ぶんです。耳が聞こえないから余計に騒ぐ」と言われ、帰るように促される。

しかし、そうした言葉が嘘だったことが程なく明らかになる。寮の指導教員が「しつけ」のために、回転中の洗濯機に女子生徒の頭を押し入れているのを目撃したのだ。救出した生徒から話を聞く中で、校長や教師たちが複数の生徒に性的虐待を繰り返している事実が明らかになる。それが原因で1人の少年は自殺したことも。

だが行政や警察は動かない。教育庁に足を運べば「放課後の出来事なら管轄じゃない」と追い返され、地元の警察に行っても「校長は敬虔なクリスチャンで知事にも顕彰された人格者。耳の聞こえない子の証言だけで逮捕できない」とあしらわれる。テレビで事件が取り上げられるとようやく社会の注目が集まり、校長たちは逮捕され、裁判を行うことに。

本作は、実際の事件をもとに書かれた小説を、韓国の俳優（コン・ユ）が自ら企画して映画化した。

## 性暴力被害者の子どもたち “聞かれなかった声”を 映画が届けた

アーヤ藍

R15+ 指定がつくほど虐待と性暴行のシーンは生々しく苦しい。だが子どもたちが実際に味わった恐怖や痛みはこれ以上だろう。それほどリアルに描いたのは、縁故主義と癒着がはびこる韓国社会で、犯人たちが軽い刑罰しか科されなかったことにもあるだろう。許されてはいけない。変えなければいけない。製作陣の覚悟があふれて伝わる。

そして本作がとてもよく映し出しているのが「子どもたちの声が聞かれない」社会の実態だ。そもそも暴力を受けた子どもたちは親が知的障害者であったり家庭が困窮していたりといった理由で、家族から“手放され”て学校の寮に入れられていた。しかしその断絶した「法的な家族」が学校からの補償金と引き換えに示談をのんでしまう。被害に遭ったのは子どもたちなのに。勇気を振り絞り証言台に立って闘おうとしているのに……。

望む判決は得られずに終わるが、ともに闘い寄り添い続けたイノたちに子どもたちは「私たちが他の人と同じように大切な存在だと知った」と語る。声が聞かれるということは、意思を尊重されること。それは命を肯定されることなのではないだろうか。

子どもたちの声が詰まった本作が韓国で公開されると大きな反響を呼び、本事件の再捜査と性暴力の厳罰化を盛り込んだ新しい法の制定が実現した。日本社会にも子どもの声を取り入れて変えるべきこと、決めるべきことがたくさんあるはずだ。



アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題にかかわる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』（春眠舎）。

